

四日間

ガールシン

二葉亭四迷訳

青空文庫

忘れもせぬ、其時味方は森の中を走るのであつた。シュツシュツという弾丸たまの中を落来おちくる小枝をかなぐりかなぐり、山査子さんざしの株を縫むうように進むのであつたが、弾丸たまは段々烈しくなつて、森の前方むこうに何やら赤いものが隠現ちらちら見える。第一中隊のシードロフという未だ生なまわか若い兵が此方こつちの戦線へ紛まぎれ込こんでいるから如何どうしてだらう？ と忙せわしい中で閃ちらと其様そんな事を疑つて見たものだ。スルト其奴そいつが矢庭やにわにペタリ尻餅つを搗ついて、狼うろたえ狽たた眼を円くして、ウツとおれの面かおを看た其口から血が滴たらたら々々……いや眼に見えるようだ。眼に見えるようなのは其それ而已ばかりでなく、其時ふツと気が付くと、森の殆ど出端ではずれの蓊鬱こんもりと生茂はえしげつた山査子さんざしの中に、居おる

わい、敵が。大きな食くらいふとツ肥たた奴であつた。俺は瘦ひよわの虚弱ではあるけれど、ヤツと云つておどりかか躍おどり菟かかる、バチツという音がして、何か斯う大きなもの、トサ其時は思われたがな、それがビュツと飛で来る、耳がグワンと鳴る。打たなと気が付た頃には、敵の奴めワツと云て山査子さんざしの叢立むらだちに寄より懸かかつて了つた。匣まわれば匣まわられるものを、恐しさに度を失つて、刺とげ々とげの枝の中へ片足踏ふんごん込あせで躁あせつて藻搔もがいているところを、ヤツと一ひとつ撃うちに銃を叩落して、やたら突づきに銃劔をグサと突刺すと、獣けものの吼ほえるでもない唸うなるでもない変な声を出すのを聞捨きりにして駈とぎ出す。味方はワツワツと鬨とぎを作つて、倒こける、射うつ、という真最中。俺も森を畑はたへ駈出はたして慥たしか二三発も撃たかと思つ頃、忽ちワツという鬨とぎの音が一段高く聞えて、皆

一斉に走出す、皆走出す中で、俺はソノ……旧の処もとに居る。ハテ
 など思った。それよりも更もつと不思議なは、忽然として万籟ばんらい死して
 ときのこえ
 鯨波 もしなければ、銃声も聞えず、音という音は皆消失せて、
 唯何やら前面むこうが蒼いと思したのは、大方空であつたのだらう。頓やがて
 其蒼いのも朦朧もやもやとなつて了つた……

どうも変さな、何でも伏うつぶし臥ふしになつて居るらしいのだがな、眼
 に遮さかぎるものと云つては、唯掌しょうだい大の地面ばかり。小草おぐさが数本すほん
 に、その一本を伝わつて倒さかしまに這降はいおりる蟻あに、去年の枯草かれぐさのこれ
 が筐かたみとも見える芥あくな一ひとつつま摘つまみほど——これが其時の眼中の小天地さ。
 それをば片一方の眼で視ているので、片一方のは何か堅い、木の

枝に違いないがな、それに圧おされて、そのまた枝に頭が上のつてい
ようと云うものだから、ひどく工合がわるい。身動みうごを仕したくも、
不思議なるかな、些ちつとも出来んわい。其儘で暫く経たつ。竈馬こおろぎの
啼なく音ね、蜂の唸うなり声こえの外には何も聞えん。少しばらく焉くあつて、一し
きり藻搔もがいて、体の下になつた右手をやツと脱はずして、両かいの腕なで体
を支えながら起上ろうとしてみたが、何がさて鑽きりで揉むような痛
みが膝から胸、頭かしらへと貫くように衝つき上げて来て、俺はまた倒れた。
また真の闇の跡あと先さきなしさ。

ふツと眼が覚めると、薄暗い空に星影が隠ちらちら々と見える。はて
な、これは天幕てんとの内ではない、何で俺は此こ様な処へ出て来たのか

と身動みうごぎをしてみると、足の痛さは骨こたに応えるほど！

何なにさまこれは負傷したのに相違ちがないが、それにしても重傷おもか擦か

創すりかと、傷いた所みしよへ手を遣やつてみれば、右も左もベツとりとした

血のり。触ふれば益々痛むのだが、その痛さが齧むし齒ばが痛むように間断しつきり

なくキリキリと腹はらを撈わたられるようで、耳鳴みみがする、頭あたまが重い。両

脚あしに負傷したことはこれで臃おぼろ気げながら分つたが、さて合点の行

かぬは、何故なぜ此儘ままにして置いたろう？ 豈然よもやとは思おもうが、もしヒ

ヨツと味方敗北あかというのではあるまいか？ と、まず、遡さかのつて当

時ときの事を憶出おもしてみれば、初め臃おぼろのが末明すえはつきり亮りやうとなつて、いや如ど

何なんしても敗北あかでないと収おさまる。何故なぜと云いえば、俺おれは、ソレ倒たれた

のだ。尤なほもこれは瞭はきとせぬ。何でも皆みなが駈出かすのに、俺一人それ

が出来ず、何か前方むこうが青く見えたのを憶えているだけではあるが、
兎も角も小山の上の此畑このはたで倒れたのだ。これを指しては、背低せびくの
大隊長殿が占領々々と叫わめいた通り、此処を占領したのであってみ
れば、これは敗北したのではない。それなら何故俺の始末をしな
かったらう？ 此処は明放あけばなしの濶かっとした処、見えぬことはない
筈。それに此処でこうして転がっているのは俺ばかりでもあるま
い。敵の射撃は彼の通あり猛烈だったからな。好よし一つ頭ねじむを捻ね向け
て四下そこらの光景ようすを視てやろう。それには丁度先刻さつきしがた眼を覚して
例の小草おぐさを倒さかしまはいおり、起揚おきあろうとして仰向あおむけに倒
けて、伏臥うつぶしにはならなかつたから、勝手が好いい。それで此星も、
成程な。

やっとこなと起かけてみたが、何分両脚の痛手だから、なかなか起られぬ。到底も無益だとグタリとなること二三度あつて、さして辛うじて半身起上つたが、や、その痛いこと、覚えぬ涙ぐんだくらい。

と視ると頭の上は薄暗い空の一角。大きな星一ツに小さいのが三ツ四ツきらきらとして、周囲には何か黒いものが轟々と立つてゐる。これは即ち山査子の灌木。俺は灌木の中に居るのだ。さてこそ置去り……

と思うと、慄然として、頭髪が弥堅つたよ。しかし待てよ、畑で射られたのにしては、この灌木の中に居るのが怪しい。してみればこれは傷の痛さに夢中で此処へ這込込に違いないが、そ

れにしても其時は此処まで這込み得て、今は身動もならぬが不思議、或は射られた時は一カ所の負傷であつたが、此処へ這込でから復た一発喰つたのかな。

蒼味あおみを帯びた薄うす明あかりが幾個いくつともなく汚点しみのように地じを這はつて、

大きな星は薄くなる、小さいのは全く消えて了う。ほ、月の出汐でしおだ。これが家うちであつたら、さぞなア、好かろうになアと……

妙な声あしがする。宛あだかも人の唸うなるような……いや唸うなるのだ。誰か同

じく脚あしに傷てを負もつて、若もしくは腹たまに弾丸もを有もつて、置おきざり去うきめの憂目うきめを

見ている奴おが其処おらに居おるのであるまいか。唸うなりごえ声まざまざは顕然まざまざ

と近くにあたりするが近処あたりに人が居おそうにもない。はッ、これはしたり、

何こッの事こッた、おれおれ、この俺うなが唸うなるのだ。微かな情ない声こッが

るわい。そんなに痛いのかしら。痛いには違いあるまいが、頭がただもう茫ぼうと無感むかん覚かくになつてゐるから、それで分らぬのだろう。また横ねころん臥ねで夢になつて了え。眠ねること眠ねること……が、もし万ひよつと

一 此儘こゝろになつたら……えい、関かまうもんかい！

臥ねようとすると、蒼白うすものい月光うすものが隈なく羅うすものを敷たように仮ふしどの寝所ふしどを照して、五歩ばかり先に何やら黒い大きなものが見える。月の光を浴びて身辺ところどころさん処々とこ燦てりかえしたる照てりかえし返みを見するのは鉤ぼたん紐かか武具ておいの光るのであろう。はてな、此奴こいつ死骸しがいかな。それとも負傷ておい者ものかな

？

何方どつちでも関かまわん。おれは臥ねる……

いやいや如何どう考かんえてみても其様そのんな筈はずがない。味方あかは何処どこへ往ゆつ

たのでもない。此処に居るに相違ない、敵を逐おい払はらつて此処を守つているに相違ない。それにしては話声もせずかがり篝はぜの爆る音も聞えぬのは何故であろう？ いや、矢張やっぱり己おれが弱つているから何も聞えぬので、其実味方は此処に居るに相違ない。

「助けてくれ助けてくれ！」

と破やれた人にんげん間離ばなれのした嗶しやがれ声こえが咽喉のどを衝ついて迸ほとばしり出でた

が、応おずる者なし。大きな声が夜の空を劈つんざいて四方へ響渡つたの
みで、四下あたりはまた闐ひっそとなつて了つた。ただ相変らずきりぎりす蟋せせ蟀せせが鳴

しきつて真まん円まるな月が悲しげに人を照すのみ。

若もし其処こゝのが負傷てお者ものなら、この叫わめき声こえを聴いてよもや氣きの付

かぬ事はあるまい。してみれば、これは死骸だ。味方のかしら、

敵のかしら。ええ、馬鹿くさい！ そんな事は如何でも好いではないか？ と、また腫はれまぶた 眇まぶたごしを夢に閉じられて了った。

先刻さつきから覚めてはいるけれど、尚お眼を瞑ねむつたままで臥ねているのは、閉じた眇まぶたごし 越ひのめにも日光が見透みすかされて、開あけば必ず眼を射られるを厭いとうからであるが、しかし考えてみれば、斯じつう寂然じつとしていた方が勝ましであろう。昨日きのう……たしか昨日きのうと思うが、傷てを負つてから最もう一昼夜、こうして二昼夜三昼夜と経たつ内には死ぬ。何の業わざくれ、死は一ツだ。寧いっそ寂然じつとしていた方が好い。身動みうごきがならぬなら、せんでも好い。序ついでに頭の機能はたらきも止とめて欲しいが、こればかりは如何どうする事も出来ず、千々ちぢに思乱おもいわれ種々さまざまに思

佗びて頭いに些いの隙さも無いけれど、よしこれとても些ちとの間まの辛抱。
 頓やて浮世の隙ひが明まいて、筐かに遺たる新聞の數行すに、我軍死傷少
 く、負傷者何名、志願兵イワーノフ戦死。いや、名前も出まいて。
 ただ一名戦死とばかりか。兵一名！ 嗟あ矣あ彼の犬いぬのようなものだ
 な。

在りし昔あが顯然あと目前まに浮ぶ。これはズツと昔の事、尤もな、
 昔の事と思われるのは是ばかりでない、おれが一生の事、足を撃
 れて此処に倒れる迄の事は何も彼かもズツと昔の事のように思われ
 るのだが……或日町を通ると、人だかりがある。思わずも足を駐とど
 めて視ると、何か哀れな悲鳴を揚あげている血塗ちみの白い物を皆佇た
 立ちどまじりまじり視まている光景よう。何かと思えば、それは可愛かわ

らしい小犬で、鉄道馬車に敷かれて、今の俺の身で死にかかつて
 いるのだ。すると、何処からか番人が出て来て、見物を押分け、
 犬の衿えりがみ上みをむずと掴つかんで何処へか持つて去いく、そこで見物もち
 りぢり。

誰かおれを持つて去いつて呉れる者があるうか？ いや、此儘で
 死ぬという事であろう。が、しかし考えてみれば、人生は面白い
 もの、あの犬の不幸に遭あつた日は俺には即ち幸福な日で、歩くも
 何か酔心地、また然うあるべき理由わけがあつた。ええ、憶えば辛い。
 憶うまい憶うまい。むかしの幸福。今の苦痛……苦痛は兎角免れ
 得ぬにしろ、懐旧の念には責められたくない。昔を憶おもいだせば自
 然と今の我身に引比べられて遣瀬やるせな無いのは創傷きずよりも余程よっぽどいか

ぬ！

さて大分熱くなつて来たぞ。日が照付けるぞ。と、眼を開けば、例の山査子さんざしに例の空、ただ白昼というだけの違い。おお、隣の人。ほい、敵の死骸だ！ 何という大男！ 待てよ、見覚があるぞ。やッぱりあ矢張彼の男だ……

現在俺の手に掛けた男が眼の前に踏反ふんぞツているのだ。何の恨が有つておれは此男を手に掛けたろう？

ただもう血塗ちみじろになつてシャチコばつているのであるが、此こん様な男を戦場へ引張り出すとは、運命の神も聞えぬ。一体何者だろ
う？ 俺のように年寄としとつた母親が有あうも知しれぬが、さぞ夕暮ごとに
いぶせき埴はにゆう生の小舎こやの戸口にたたずイみ、遥はるかの空を眺ながめては、命の綱の

かせぎにん

人は戻らぬか、愛し我子の姿は見えぬかと、永く永く待わたる事であろう。

さておれの身は如何なる事ぞ？ おれも亦まつこの通り……あ

あ此男が羨ましい！ 幸福者だよ、何も聞ず、傷の痛みも感

ぜずに、昔を偲ぶでもなければ、命惜しとも思うまい。銃劔が心

臓の真中心を貫いたのだからな。それぞれ軍服のこの大きな孔、

孔の周囲のこの血。これは誰の業？ 皆こういうおれの仕業だ。

ああ此様な筈ではなかつたものを。戦争に出たは別段悪意があ

つたではないものを。出れば成程人殺もしようけれど、如何して

かそれは忘れていた。ただ飛来る弾丸に向い工合、そのみを気

にして、さて乗出して弥弾丸の的となつたのだ。

それからの此始末。ええええ馬鹿め！ 己は馬鹿だったが、此不幸なる埃及エジプトの百姓エジプトぐん（埃及軍の服を着けておつたが）、この百姓になると、これはまた一段と罪が無かろう。鮎すしでも漬けたように船に詰込れて 君士但丁堡コンスタンチノープルへ送付られるまでは、露西亞ロシアの事もバルガリヤの事も唯噂にも聞いたことなく、唯行けと云われたから来たのだ。若しも厭いやの何のと云おうものなら、笞しもとの憂目うきめを見るは愚かなこと、いずれかのパシヤのピストルの弾を喰くおうも知れぬところだ。スタンブールから此ルシチウクまで長い辛い行軍をして来て、我軍の攻撃に遭あつて防戦したのであろうが、味方は名に負う猪武者いのししむしや、英吉利仕込イギリスしこみのパテント付つきのピーボチーにもマルチニーにも怯びくともせず、前へ前へと進むから、始て怖気付おじけづ

いて遁げようとするところを、誰家のか小男、平生なら持合せの黒い拳固一撃でツイ埒が明きそうな小男が飛で来て、銃劔翳して胸板へグサと。

何の罪も咎も無いではないか？

おれも亦同じ事。殺しはしたけれど、何の罪がある？ 何の報

いで咽喉の焦付きそうなのこの渴き？ 渴く！ 渴くとは如何なものか、御存じですか？

ルーマニヤを通る時は、百何十度という恐ろしい熱天に毎日十里宛行軍したツけが、其時でさえ斯うはなかつた。ああ誰ぞ来て呉れば好いがな。

しめた！ この男のこの大きな吸筒、これには屹度水がある

！ けれど、取りに行かなきやならぬ。さぞ痛む事だろうな。え

い、如何どうするもんかい、やツつける！

と、這出はいだす。脚あしを引摺ひきずりながら力の脱けた手で動かぬ体を動か

して行く。死骸はわずか一間と隔てぬ所に在るのだけれど、その

一間が時に取つては十里よりも……遠いのではないが、難儀だ。

けれども、如何どう仕様しようも無い、這はつて行く外はない。咽喉のどは熱して

焦こげるよう。寧いっそ水を飲まぬ方が手短に片付くとは思いながら、

それでも若もしやに羈ひかされて……

這はつて行く。脚あしが地に泥なすんで、一ひと動うごする毎ごとに痛こさは耐こきれな

いほど。うんうんという唸うめ声ごえ、それが頓やが頓やが泣なみになるけれど、そ

れにも屈めげずに這はつて行く。やツと這はいつ付つく。そら吸すい筒づつ——果はして

水みづが有ある——而すも沢山づつ！ 吸すい筒づつ半はん分ぶんも有あつたろうよ。やれ嬉うれし

や、是でまず当分は水に困らぬ——死ぬ迄は困らぬのだ。やれやれ！

兎も角も、お蔭さまで助かりますと、片肘かたひじに身を持たせて吸すいづつ筒いづつの紐とぎを解とぎにかかったが、ふツと中心を失つて今は恩人の死骸の胸へ伏倒のめりかかった。如何にも死人臭しびとくさい匂におがもう芬ぶんと鼻びに来る。飲のんだわ飲のんだわ！ 水は生温なまぬるかつたけれど、腐敗しては居なかつたし、それに沢山せいらに有る。まだ二三日は命つなが繋つながれようというもの、それそれ生理せいり心得こころえ草ぐさに、水みづさえあらば食しょく物もつなくとも人は能よく一週間以上活いくべしとあつた。又餓死うえじをした人の話はなが出ていたが、その人は水を飲のでいたばかりに永く死切しれなかつたという。

それが如何どうした？ 此上五六日生延びてそれが何なにになる？ 味方は居にず、敵は遁にげた、近くに往来はなしとすれば、これは如何どうでも死ぬに極きままっている。三日で済む苦しみを一週間に引延すだけの事なら、寧いっそ早く片付けた方が勝ましではあるまいか？ 隣の側そばに銃もある、而も英吉利製イギリスせいの尤物わざものと見える。一寸手ちよっを延すだけの世話で、直ぐ埒らちが明く。皆打切らなかつたと見えて、弾丸たまも其処そこに沢山転まがっている。

さア、死ぬか——待つてみるか？ 何を？ 助かるのを？ 死ぬのを？ 敵が来て傷てを負おつたおれの足の皮剥かわはぎに懸かるを待つてみるのか？ それよりも寧いっそ我手わてで——思ひとおもに……

でないことさ、そう氣を落おしたものでないことさ。活いきられるだ

け活^{いき}てみようじゃないか。何のこれが見付かりさえすれば助かるのだ。事に寄ると、骨は避^よけているかも知れんから、そうすれば必ず治る。国へ帰つて母にも逢える、マ、マ、マリヤにも逢える……

ああ国へはこうと知らせたくないな。——^{ひとおもい}思に死だと思わせ
て置きたいな。そうでもない偶^{ひよつと}然おれが三日も四日も藻搔^{もがい}て
たと知れたら……

眼^まが眩^まう。隣歩きで全^{すつかり}然力が脱けた。それにこの恐^{おつそ}ろしい臭
気は！ 随分と土気色になつたなア！ ……これで明日^{あすあさつて}明後日と
なつたら——ええ思遣られる。今だつて些^{ちっ}ともこうしていたくは
ないけれど、こう草^{くたびれ}臥^ふては退^のくにも退^のかれぬ。少し休息したら

また旧処へ戻ろう。幸いと風を後にしているから、臭気は前方へ持つて行こうというもの。

すっかり全力が脱けて了った。太陽は手や顔へ照付ける。何か被りたくも被る物はなし。責めて早く夜になとなれ。こうだによつてと、これで二晩目かな。

などと思う事が次第に糾れて、それなりけりに夢さ。

大分永く眠っていたと見えて、眼を覚してみればもう夜。さて何も変った事なし、傷は痛む、隣のは例の大柄の五体を横たえて相変らず寂としたもの。

どうも此男の事が気になる。遮莫おれにしたところで、憐し

いもの可愛ものを残らず振棄てて、山超え川越えて三百里を此様なバルガリヤ三界へ来て、餓えて、凍えて、暑さに苦しんで——これが何と夢ではあるまいか？ この薄福者の命を断つたそればかりで、こうも苦しむことか？ この人殺の外に、何ぞおれは戦争の利益になつた事があるか？

人殺し、人殺の大罪人……それは何奴？ ああ情ない、此おれだ！

そうそう、おれが従軍しようと思立つた時、母もマリヤも止めはしなかつたが、泣いたつけ。何がさて空想で眩んでいた此方の眼にその涙が這入るものか、おれの心一ツで親女房に憂目を見ずるといふ事に其時はツイ気が付かなんだが、今となつて漸う漸う

眼が覚めた。

ええ、今更お復習しても始まらぬか。昔を今に成す由もないかな。

しかし彼時親類共の態度が余程妙だった。「何だ、馬鹿奴！お先真暗で夢中に騒ぐ！」と、こうだ。何処を押せば其様な音

が出る？ ヤレ愛国だの、ソレ国難に殉ずるのという口の下から如何して彼様な毒口が云えた？ あいらの眼で観ても、おれは即ち愛国家ではないか、国難に殉ずるのではないか？ ではあるけれど、それはそうなれど、おれはソノ馬鹿だという。

で、まず、キシニョーフへ出て来て背囊やら何やらを背負されて、数千の戦友と俱に出征したが、その中でおれのように志願

で行くものは四五人とあるかなし、大抵は皆成ろう事なら家に寝
 ていたい連れんじゆう中ちゆうであるけれど、それでも善くしたもので、所いわゆ
 謂決死連の己おれたち達と同じように従軍して、山を超え川を躪え、
 いざ戦闘となつても負けずに能く戦う——いや更と手際が好いか
 も知れぬてな。尤も許しさえしたら、何も角も抛かほつて置いてさつき々と
 帰るかも知れぬが、兎も角も職分だけは能く尽す。
さつ颯と朝風が吹通ると、山查子さんざしがざわ立だつて、寝惚ねぼけた鳥が一羽飛
 出した。もう星も見えぬ。今迄薄暗かつた空はほのぼのと白しらみか
 かつて、やわらかはねい羽毛を散らしたような雲が一杯に棚引き、灰色の暗も
や霧は空へ空へと晴て行く。これでおれのソノ……何と云つたもの
 かしら、生にもあらず、死にもあらず、謂わば死しく苦の三日目か。

三日目……まだ幾日いくか苦しむ事であろう？　もう永くはあるまい。大層弱ったからな。此塩梅あんばいでは死骸そばの側を離れたくも、もう離れられんも知れぬ。やがておれも是になつて、肩を比ならべて臥ねていようが、お互に胸悪くも思はなくなるのであろう。

兎に角水は十分に飲むべし。一日に三度飲もう、朝と昼と晩とにな。

日の出だ！　大きく盆のようなのが、黒々と見ゆる山査子さんざしの枝に縦横たてよこに断截たちきられて血潮のように紅くれない、今日も大方熱い事であろう。それにつけても、隣の——貴様はまア何となる事ぞ？　今でさえ見るも浅ましいその姿。

ほんに浅ましい姿。髪の毛は段々と脱落ち、地体が黒い膚の色
あおぎは蒼褪めて黄味さえ帯び、顔の腫脹むくみに皮が釣れて耳うしろの後で罅裂れ、
うじうごめそこに蛆が蠢き、脚あしは水腫みずばれに脹上り、脚絆あわせめの合目からぶよ
はみだぶよの肉が大きく食出し、全身むくみ上つて宛然さながら小牛のよう。
 今日一日太陽さうに晒されたら、これがまア如何どうなる事ぞ？ こう寄
 添たまつていては耐らぬ。骨しやりが舍利しやりに成ろうが、これは何でも離れね
 ばならぬ——が、出来るかしら？ 成程手も挙げられる、吸筒すいづつ
 も開けられる、水も飲めることは飲めもするが、この重い動かぬ
 体を動かすことは？ いや出来ようが出来まいが、何でも角かでも
 動かねばならぬ、仮令たとえ少しずつでも、一時間によし半歩ずつでも。
 で、弥移いよいよむっこし居まを始めてこれに一朝ひとあさまるつぶ全潰れ。傷いたんも痛だが、何

のそれしきの事に屈めげるものか。もう健康な時の心持は忘わすれたようで、
 全く憶おもい出だせず、何となく痛いたみに慣なんだ形だ。一間ばかりの所を一
 朝かかつて居い去ざつて、旧もとの処へ辛かろうじて迎たどり着つきは着いたが、さ
 て新鮮の空気を呼吸し得たは束の間、尤も形の徐そろ々そろ壊くず出だした
 死骸を六歩と離れぬ所で新鮮の空気の沙汰も可お笑かしいかも知れぬ
 が——束の間で、風が變つて今度は正ま面もに此方こつちへ吹付ける、その
 臭くさきに胸がむかつく。空からの胃袋は痙けい攣れんを起したように引締つて、
 臟腑ぞうふが顛ひつくり倒かえるような苦しみ。臭い腐敗した空気が意地悪くむ
 んむツと煽あおり付つける。

精も根も尽果てて、おれは到頭泣出した。

全く敗^{まい}つて、ホウとなつて、殆ど人心地なく臥^ねて居^おつた。ふツと
 ……いや心の迷の空耳かしら？ どうもおれには……おお、矢^{やっば}
 張^り人声だ。蹄^{ひづめ}の音に話声。危なく声を立てようとして、待てし
 ばし、万^{ひよつと}一敵だつたら、其の時は如何^{どう}する？ この苦しみに輪
 を掛けた新聞で読んでさえ頭^{かみ}の髪^けの弥^よ堅^ぢそうな目に遭^あおうも知^しれぬ。
 随^い分^{きが}生^わ皮^はも剥^はがれよう、傷^てを負^あうた脚^{あし}を火^ひ炙^{あぶ}りにもされよう…：
 それしきは未^{まだ}な事、こういう事にかけては頗る思付の好^いい渠^き奴^{やつら}等
 の事、如何^{どん}な事をするか知^しれたものでない。渠^き奴^{やつら}等の手^てに掛^かつて弄^な
 殺^ぶりにされようより、此処^{こゝ}でこうして死^しだ方が寧^いろ勝^{まし}か。と
 はいうものの、もしひよつと是^{こゝ}が味方であつたら？ えい山^{さん}査^ざ子^ご
 奴^{しめ}がいけ邪魔^{じま}な！ 何だと云つてこう隙^{ひま}間^まなく垣^{かき}のよ^うに生^なえく

さった？ 是に遮さいえぎられて何も見えぬ。でも嬉やたつた一カ所窓の
 ように枝が透すいて遠く低地ひくちを見下される所がある。あの低地ひくちには
 慥たしか小川があつて戦争前ぜんに其水を飲だ筈。そう云えばソレ彼処あすこに
 橋はしがわり代わたりに架した大きな砂岩石さがんせきの板ばんじやく石いしも見える。多分是を
 渡るであらう。もう話声も聞えぬ。何国の語で話していたか、薩さつぱ
 張り聴分りられなかつたが、耳さえ今は遠くなつたか。己おのれやれ是
 が味方であつたら……此処なまじから喚わめけば、彼処あすこからでもよもや聴付
 けぬ事はあるまい。愁なまじいに早まつて虎狼こうろうのような日傭兵ひやといへいの手に
 掛くろうより、其方が好いい。もう好加減いいかげんに通とりそうなもの、何を
 愚頭ぐずぐず々々しているのかと、一刻千秋の思いい。死骸いささかの臭気いささかは些も薄
 らいだではないけれど、それすら忘れていた位。

不意に橋の上に味方の騎兵が顕れた。藍色の軍服や、赤い筋や、鎗の穂先が煌々と、一隊挙つて五十騎ばかり。隊前には黒髯を怒らした一士官が逸物に跨つて進み行く。残らず橋を渡るや否や、士官は馬上ながら急に後を捻向いて、大声に

「駄足イ！」

「おおい、待つて呉れえ待つて呉れえ！ お願いだ。助けて呉れえ！」

競立きそいたつた馬の蹄ひづめの音、サーベルの響、がやがやという話声にしやがれごえ 嗶声は消圧けおされて——やれやれ聞えぬと見える。

ええ情ないと、気も張も一時じに脱けて、パツタリ地上へひれ伏しておいおい泣出した。吸筒すいづつが倒れる、中から水——といえは

其時の命、命の綱、いやさ死期しごを緩ゆるべて呉ゆるれていようというソノ
靈藥ごしほしほが滾々と流出る。それに心附いた時は、もうコップ半分も
残つてはいぬ時で、大抵はからからに乾燥はしやいで咽喉のどを鳴らしてい
た地面に吸込まれて了つていた。

この情ない目を見てからのおれの失望落胆と云つたらお話にな
らぬ。眼を半眼はんがんに閉じて死んだようになっておつた。風は始終
向むきが變つて、或は清新な空気を吹付けることもあれば、又或は例
の臭氣むせに嘔むせ咽させることもある。此日隣のは弥いよいよ々浅あましい姿に
なつて其惨状は筆にも紙にも尽されぬ。一度光景ようすを窺うかがおうとして、
ヒョツと眼を開あいて視て、慄然ぞっとした。もう顔の痕あと迹かたもない。
骨を離れて流れて了つたのだ。無氣味ぶきびにゲタと笑いかけて其儘固

まつて了つたらしい頬ほお柎げたの、その厭らしさ浅ましき。随分されこ髑こ

うべ體を扱つて人頭の標本を製した覚もあるおれではあるが、ついで此こん様なのに出逢つたことがない。この骸骨が軍服を着けて、紐ほ

たん釦ばかりを光らせている所を見たら、覚えず胸震が出て心中で嘆息を漏した、「嗚呼あ戦争とは——これだ、これが即ち其姿だ」と。

相変らずの油あぶら照でり、手も顔も既もうひりひりする。残少せうな水も一滴残さず飲干して了つた。渴かわいて渴いて耐えられぬので、一ひ

とししずく滴つ嘗もめる積もりで、おもわずガブリと皆飲んだのだ。嗚呼あ彼の騎兵がツイ側そばを通る時、何故なぜおれは声を立てて呼ばなかつたろう？

よし彼あれが敵であつたにしろ、まだ其方ましが勝であつたものを。なんの高たかが一二時間責せめさいなまれるまでの事だ。それをこうして居

れば未だ幾日いくかごろごろして苦しむことか知れぬ。それにつけても
 憶おもいだ出すは母の事。こうと知ったら、定めし白髪しらがを引ひき撈むしつて、
 頭を壁へ打付けて、おれを産んだ日を悪日あくびと咒のろつて、人の子を苦
 しめに、戦争なんぞを発明した此世界をさぞ罵る事たろうなア！
 だが、母もマリヤもおれがこう 踬もが死きに死ぬことを風の便たよりに
 も知ろうようがない。ああ、母上にも既もう逢えぬ、いいなずけの
 マリヤにも既もう逢えぬ。おれの恋ももう是これ限ぎりか。ええ情けない
 ！ と思うと胸が一杯になつて……

えい、また白犬めが。番人も酷むごいぞ、頭を壁へ叩付けて置いて、
 掃溜はきだめへポンと抛ほうり込んだ。まだ息氣いきが通かよつていたから、それか
 ら一日苦しんでいたけれど、彼犬あのいぬに視くらべればおれの方が余程よっぽど

惨憺だ。おれは全三日苦しみ通しだものを。明日は四日目、それから五日目、六日目……死神は何処に居る？ 来てくれ！ 早く引取ってくれ！

なれど死神は来てくれず、引取つてもくれぬ。此凄まじい日に照付られて、一滴水も飲まなければ、咽喉の炎えるを欺す手段なく剩さえ死人の臭が腐付いて此方の体も壊出しそう。その臭の主も全くもう溶けて了つて、ポタリポタリと落来る無数の蛆は其処らあたりにうようよぞろぞろ。是に食尽されて其主が全く骨と服ばかりに成れば、其次は此方の番。おれも同じく此姿になるのだ。

その日は暮れる、夜が明ける、何も変つた事がなくて、朝にな

つても同じ事。また一日を空に過す……

山査子の枝が揺れて、ざわざわと葉摺の音、それが宛然ひそめきたつて物を云っているよう。「そら死ぬそら死ぬそら死ぬ」と耳の端で囁けば、片々の耳元でも懐しい面「もう見えぬもう見えぬもう見えぬ」

「見えん筈じゃ、此様な処に居るじやもの、」
と声高に云う声が何処か其処らで……

ぶるぶるとしてハツと気が付くと、隊の伍長のヤーコウレフが黒眼勝の柔しい眼で山査子の間から熟と此方を覗いている光景。

「鋤を持ち来い！ まだ他に二人おる。こやつも敵ぞ！」という。
「鋤は要らん、埋ちやいかん、活て居るよ！」

と云おうとしたが、ただたより便べんない呻うめきごえ声こゑが乾からびつ付ついた唇くちびるを漏もれ
たばかり。

「やッ！ こりや活いきとるンか？ イワーノフじゃ！ 来い来い、
早はやう来い、イワーノフが活いきとる。軍医殿を軍医殿を！」

瞬しゅんく間に水みづ、焼耐やけど、まだ何なにやらが口くちゆう中ちゆうへ注そそぎい入いれられたよ
うであつたが、それぎりでまた空くう。

担架たんかは調子好よく揺ゆれて行く。それがまた寝ねせ付つけられるようようで快た
い。今眼いまが覚さめたかと思おもうと、また生しょうたい体たいを失しう。繃おん帯たいをして
から傷いたみの痛いたも止とんで、何なにとも云いえぬ愉こころよき快たに節ふし々々も緩ゆるむようよう。

「止とまれ、卸おろせ！ 看かん護ご手て交か代だい！ 用よう意い！ 担になえ！」

号令ごうれいを掛かけたのは我衛われゑい生せい隊たい附つのピョートル、イワーヌイチとい

う看護長。頗る背高のッぼうで、大の男四人の肩に担かつがれて行くのであるが、其方へ眼を向けてみると、まず肩が見えて、次に長い疎まぼら髯ひげ、それから漸く頭が見えるのだ。

「看護長殿！」

と小声に云うと、

「何か？」なん

と少し屈こご懸みかかるようになる。

「軍医殿は何と云われました？ 到底助かりますまい？」

「何を云う？ そげな事あつて好よかもんか！ 骨に故障が有るちゆ

うじやなし、請合しあわせうて助かる。貴様は仕合しあわせぞ、命を拾うたちゆ

うもんじやぞ！ 骨にも動脈にも触れちよらん。如何どうして此三昼

夜ばツか活いきちよつたか？ 何を食うちよつたか？

「何も食いません。」

「水は飲まんじやつたか？」

「敵すいづつの吸筒すいづつを……看護長殿、今は談話はなしが出来ません。もう少し後

で……」

「そうじやろうそうじやろう寝ろ寝ろ。」

また夢に入いつて生しょうたい体たいなし。

眼が覚めてみると、此処は師団の仮病舎。枕まくらもと頭あたまには軍医や

看護婦が居て、其外彼得堡ペテルブルグで有名な某国ぼうこくしゆ手てがおれの傷けがを負おつ

た足の上に屈こごみかか懸かかつているソノ馴染なじみの顔も見える。国手は手を

血塗ちみどろにして脚あしの処ところで暫く何かやツていたが、頓やがて此方こちうらを向いて、

「君は命いのち拾びろ！ もう大丈夫。脚あしを一本お貰い申した
がね、何の、君、此こ様な脚あしの一本位ぐらい、何でもないさねえ。君もう
口くちが利きけるかい？」

もう利きける。そこで一いち伍ぶ一じ仕じゆうの話わをした。

青空文庫情報

底本：「平凡 私は懷疑派だ」講談社文芸文庫、講談社

1997（平成9）年12月10日第1刷発行

底本の親本：「二葉亭四迷全集」筑摩書房

1984（昭和59）年11月～1991（平成3）年11月

入力：長住由生

校正：：はやしだかずい

2000年11月8日公開

2005年12月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

四日間 ガールシン

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 二葉亭四迷訳
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>